

## 第17回全国大会

(2017年11月18日(土)、於 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス)

### 要 旨

#### I 研究発表

##### 第一室 (307室)

1. 眠りのイメージの象徴性——J. W. ウォーターハウス《聖カエキリア》をめぐって

若名 咲香 (筑波大学大学院)

本発表では、図像分析や同時代の絵画との比較をしつつ、J. W. ウォーターハウスの《聖カエキリア》の「眠り」の意味を考察した。この作品は、E. バーン＝ジョーンズやD. G. ロセッティの作品と図像的関連性を持つ。さらに従来指摘されてきたA. テニスンの「芸術の殿堂」だけでなく、『黄金伝説』からの影響も認められる。『黄金伝説』に基づく「3」の数字の強調や花のモチーフの象徴性は、カエキリアの奇跡や聖性を示唆している。加えて、画面の細部描写は、聴覚・触覚・嗅覚等の感覚を象徴し、聖女が眠りの中で感覚的知覚を拓げる様相を暗示する。また、夢や無意識への接続手段と考えられた「眠り」は、19世紀後半の絵画の中で、目を閉じたからこそ見える領域を示唆する表現として機能した。目を閉じ敬虔なイメージを捉えるJ. E. ミレイの《盲目の少女》のように、《聖カエキリア》には眠りの先で感覚を拓げ聖なるヴィジョンに到達する聖女が描かれているのである。

2. アイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動におけるステンドグラス芸術——An Túr Gloine と Harry Clarke を中心に

高橋 優季 (青山学院大学(兼))

本発表は、19世紀後半から20世紀初頭のアイルランドで「ケルト復興」を背景に広まったアイリッシュ・アーツ・アンド・クラフツ運動に着目した。

そして、本来ウィリアム・モリスの提唱に基づいて英国を拠点に展開したこの工芸美術の促進運動が、いかにして被植民支配側にあたるケルト民族固有の国民的文化価値に視覚的な審美性を与えたかを検証した。主な検証対象としたのは、当時アイルランドの芸術産業として国内の経済的自立の促進に貢献したステンドグラスの発展経緯である。1903年に政府の協力を得てダブリンに設立された工房 An Túr Gloine と、同時期に活躍した職人 Harry Clarke の具体的作品と特徴、国内外の受容、制作背景を時系列的に精査することで、ヴィクトリア朝後期以降のラファエル前派の系統を引く技術やセンスが積極的に取り入れられ、植民者対被植民者という対立構造を越えてアイルランドに特有の装飾美と民衆生活とを調和させるに至った経緯が明らかになった。

### 3. 象徴としてのラスキン——労働者教育とアイデンティティの形成

横山 千晶 (慶應義塾大学)

1870年の義務教育制度の確立と並行して、イギリスでは19世紀の半ばから、高等教育を受けることが叶わなかった労働者たちに、その機会を提供する成人教育の取り組みが本格的に始まった。その動きの中でジョン・ラスキンは、実践とその思想を通して、教育の取り組みに直接・間接的に大きな影響力を及ぼすことで、今も続く様々な成人教育機関の理念に名を残すことになる。この発表では、実際にラスキンが設立当初から素描クラスの教員としてかかわった労働者大学(1854年設立)の中での彼の言動と受容のみならず、続く大学拡張運動(1873年開始)、トインビー・ホール(1884年設立)、ラスキン・コレッジ(1899年設立)の活動の中で生み出されたラスキン像の変遷とラスキンからの引用と言及を追うことで、その影響力の幅広さと、各機関がラスキンの実践と思考の諸相をどのように自らのアイデンティティ確立に活用していったのかを跡付けた。

## 第二室 (308室)

1. 拒絶する/される人造美女——W. S. Gilbert, *Pygmalion and Galatea* (1871) に関する一考察

林 美里 (日本女子大学(兼))

「人間の手で人間を創造する」空想は、古代より様々な文学作品で表現されてきた。発表では最初に神話時代からの人造人間作品の系譜を追い、次に19世紀のピグマリオン神話の流行の最中に生まれた戯曲、W. S. Gilbertの*Pygmalion and Galatea* (1871)について取り上げた。人造人間 Galateaが自らの意思で人生を選択する展開について、神話との相違点や*Frankenstein*との比較がされた当時の舞台批評を参照しながら考察を行った。人造人間構想には蘇生思想が根底にあった。Galateaが自らの命を絶つ結末は人間から強制的に生を押し付けられた人造人間がそれを拒絶し、死の世界に戻ることを象徴している。後に初のアンドロイド作品となったリラダンの「未来のイヴ」の中でも同様の表現がされていることや、人工知能を搭載されたロボットが自ら命を絶った現代の事例等を紹介し、本作品がその後の人造人間やSFのフィクション世界に一つの道筋を付けただけでなく、現代の人工知能の行く末まで光を当てる作品であることを示唆した。

2. 後期ヴィクトリア朝の児童向け雑誌にみられる Alfred Tennyson 受容——*Girl's Own Paper* と *Boy's Own Paper* を中心に

鈴木 千枝 (津田塾大学(院))

1850年11月にWilliam Wordsworthの後をうけて桂冠詩人となったAlfred Tennyson (1809-92)はそれ以降名実ともにヴィクトリア朝を体現する詩人として扱われた。他方で、Tennysonが活躍した中後期ヴィクトリア社会では、印刷技術の発達によるコスト低下を背景に読書文化が拡大し、若年層向け雑誌の出版が盛んになった。1870年代から世紀末にかけて出版された代表的な若年層向けの雑誌である*Boy's Own Paper*の中では、Tennyson作品は、「英国海軍」や「愛国心」の文脈で紹介されることが多い。

対照的に、姉妹誌で商業的に大きな成功を遂げた若い女性向けの *Girl's Own Paper* の中では、Tennyson の描く女性像の紹介が目立つ。例えば、女性の理想像の一つとして紹介される “The Princess” (1847) の王女 Ida は、男性上位の家父長制の中で男子禁制の女子大学を創立するが、女装をして紛れ込んだ王子との恋に物語は収斂する。両誌で異なる文脈ではありながら、パターンリスティックな Tennyson 像が構築され、若年層に啓蒙的な精神的支柱としての詩人像が形成された。

### 3. 19世紀英国と20世紀日本における『大君の都』の影響の一考

濱島 広大 (筑波大学(院))

本発表ではまず19世紀英国において『大君の都』は日本の政治や外交に関する内容に注目して読まれ、日本の生活や文化に関する内容は補助的に理解されていたことを明らかにした。

次に、20世紀日本において『大君の都』がどのように読まれたかを考察するために、一例として芥川 の作品 (『日本の女』や『侏儒の言葉』) と、彼が所有していた『大君の都』の読書痕 (線や印の記入) を比較し、芥川は自身の関心に即して『大君の都』を読み解き、作品に活かしていたことに言及した。

19世紀英国における『大君の都』の影響と、20世紀日本における『大君の都』影響を比較し、『大君の都』がそれぞれの時代の関心を反映した日本像形成に影響を与えたことを明らかにした。同時に、『大君の都』が政治、外交、生活、文化など多岐に渡る内容に関して自身の眼で見たものを扱っているからこそ、時代背景が変化しても参照される文献となり得たことを示した。

## II シンポジウム (301室)

「南方熊楠から見たヴィクトリア朝——科学と神秘主義と文学」

司会：大石 和欣 (東京大学)

世紀末のイギリスにおいて、科学を軸に新たな知の領域が編成されつつあった。職業的科学家集団が出現し、とくに植物学の分野では従来の博物学の流れをくむアマチュアと、博物館・大学の研究者が協力する体制が構築されていく。『ネイチャー』といった科学雑誌によっても支えられ、ヨーロッパやアメリカのみならず、アジアを含む国内外での科学ネットワークがはり廻らされていく。その一人が南方熊楠である。同時に、神秘主義(オカルティズム)もそうした科学研究の一翼を担っていたことも忘れてはならない。今回のシンポジウムでは、神秘主義と科学が共存・共栄したヴィクトリア朝を、熊楠を視点にして見つめ直してみた。

南方熊楠の学問形成とそのイギリス時代

パネリスト：田村 義也 (成城大学(兼))

南方熊楠が生まれた1867年は、夏目漱石ら明治日本文化の建設者が集中して生まれた、日本文化史上の特異年である。彼らは前近代の日本と東アジアの文化・学術伝統を受け継ぎつつ、西欧近代に取り組むという時代の課題を共有していた。その中でも南方は、26歳で*Nature* 誌に研究ノートを発表を始め、大英博物館に情報提供者として出入りし、同館図書館の濃密な利用者となるなど、その世代的課題のもっとも先鋭的な実践者であった。生涯では*Nature* 誌に51本、*Notes and Queries* 誌に324本という英文研究ノート掲載本数の多さは顕著であり、またそうした業績に対する同時代や後世の研究者からの反応も、ある程度存在する。東西文明間の比較科学史を出発点とした彼の英文論考の根柢には、前近代までは東洋にも欧州に劣らない科学の伝統があったことを西欧人に知らしめるというアジア主義的感情があった。同時に彼の研究誌への投稿と、大英博物館館東洋部門やイギリス人日本研究者および変形菌研究者への協力において彼は、一貫し

て情報提供者として西欧近代科学の最前線に貢献するという立場だった。このことを「研究者」とは異なり劣る存在とは考えなかった点に、彼の学術思想の非20世紀的な独自性がある。

#### イギリスとアジアを結ぶネットワーク

パネリスト：志村 真幸（京都外国語大学(兼)）

19世紀末の『ネイチャー』には、アジアに関する多くの話題が確認される。もっとも多いのはインドで、現地に滞在するイギリス人と少数の現地人から投稿があった。数としては中国、日本が続く。日本に関しては、地質学者のミルンやペリーら御雇外国人たちが磐梯山噴火や濃尾地震を報告しているほか、小藤文次郎など日本人学者の論文が要約転載されることもあった。

南方熊楠は1893年10月6日号の『ネイチャー』に「東洋の星座」でデビューし、以後、51篇もの論文を寄せた。熊楠はロンドン滞在中に投稿したが、こうしたアジア人の例も珍しいというほどではない。熊楠は和漢の古典籍を縦横無尽に用い、科学史に関する話題を論文化した。英語と漢文／日本語の両面からアジアとヨーロッパを比較できたのが熊楠の強みであり、誌面でも貴重な情報提供者とみなされた。

ただし、アジアからの投稿にはかなり怪しげな内容のものもあった。マナのようなものが降ったという報告まで掲載されたし、熊楠にも日本におけるカニバリズムを挙げつらねた論文がある。『ネイチャー』のような科学誌においても、東洋はいまだに謎めいた土地であり、こうした議論がイギリス人科学者による近代的な論文と並んでいたのであった。

## 熊楠・科学・神秘主義——イギリス文学を通して考える

パネリスト：小澤 央 (明治大学)

本発表は、南方熊楠の科学、神秘主義との関わりについて、19世紀末のイギリス文学の視点から考察した。とりわけ、熊楠が英国に滞在した時期に重要な科学ロマンスを発表し、科学ジャーナリストとしても活躍したH. G. ウェルズに注目した。彼らはともにハーバート・スペンサー、T. H. ハックスリーらの進代言説から影響を受け、心霊主義に深い関心を持ちながら、自らの思想世界を構築した。二人の作品は人類学とも関係が深い。東洋人として熊楠はこの学問の観察者であると同時に被観察者でもあるという意識を抱いていたが、ウェルズの初期作品には、観察をめぐるこのような両義性が繰り返し登場し、また労働者階級出身の彼自身の人生にも類似の両義性が見られた。二人の知の巨人が出現し活躍した背景には、彼らが当時の社会や学問において一種のアウトサイダー的立場にあったことに加え、科学が神秘主義と密接な繋がりを持ち、それが制度化されておらずアマチュアの活動する場を残していたことなどの事情があったのではないか。

コメンテータ：川島 昭夫 (京都大学(誉))

自らリテラティをもって任じた南方熊楠は、海外雑誌に多く論文が掲載されたために、「世界的」民俗学者・博物学者として紹介されることがある。その知的な活動の模範をロンドン時代に身体化したアマチュアの学問に求めた熊楠には、確かにある種の国際性が看取される。1890年代の英国の科学・思想との同時代性というものを想定する時、議論の方向を三つに分類することができる。一は熊楠へのその影響について、一は熊楠によるそれへの影響について、残る一は、同時代思想との共振関係である。本シンポジウムでは、期せずしてその三種が、それぞれ志村氏、田村氏、小澤氏の報告によって実現した。特に熊楠による影響については、従来未開拓の分野であったので、今回の発言は貴重であった。

### III ラウンドテーブル

ヴィクトリア朝後期の少女雑誌——*Girl's Own Paper* をめぐって

司会・提題者：川端 有子（日本女子大学）

提題者：牟田 有紀子（早稲田大学（院））

世紀末のイギリスで、大人気を博した『ボイズ・OWN・ペーパー』の創刊後二年して、読者からの強い要望からその少女版、『ガールズ・OWN・ペーパー』が、同じ宗教叢書協会から発刊された。10代の少女から25歳くらいの未婚の女性をターゲットとしたこの雑誌は、瞬間に人気の少女誌となった。まず川端がその出版事情、編集者、背景となった社会事情、ターゲット読者について報告し、つづいて牟田が内容に踏み込み、紙面構成、個々の記事、執筆者、挿絵などについて述べた。その後、川端はとくに「化粧・美容・健康」をテーマにした記事を取り上げて、同誌の傾向を示し、牟田は将来の高等教育、職業についての記事を取り上げた。フロアからは宗教叢書協会と中身との関係、BOPとの比較の重要性や、ロウアー・ミドルの教育問題などに質問やコメントがあがり、参加者も一緒に議論の場を持てたことは非常に有意義だったと考えられる。

### IV 特別講演 (301室)

ヴィクトリア朝のウォーキング——登山、散策、文学

中島 俊郎（甲南大学）

ヴィクトリア朝にあって「歩行」の精神性は、山岳が介在することで大きく二分化されていった。興行師アルバート・スミスはパノラマ『モンブラン・ショー』をかかげ、大人気を博しアルプスを卑俗化した。一方、思想家レズリー・スティーヴンは、「足」で考える人であった。ケンブリッジ大学在学中より、ウォーキング・クラブを主宰し、長じてはアルパイン・クラブ会長となり、英国山岳会の黄金期を形成した。ラスキンにとつて山は仰ぐ対象でしかなかったが、スティーヴンは山を登り、瞑想する場とした。後年、ロンドン郊外を散策する徒歩会「サンデー・トランプス」を組織

し、メレディス、ダーウィンなどの知識人の参加をえて、知の横断的な冒険を実践し文化の胎動を促した。同時期、歩行はフットパス保存協会などと連動して環境問題と密接に結びついていくが、そこにもスティーヴンは参画している。本講演は「歩行」がもたらした諸相を追究し、その文化変容を位置づけた。